

末黒野

すぐろの

2月号 (通巻822号)



しぐれ虹

小川玉泉

昼日中街空低く渡る雁
屋根よりも高く桜の夕紅葉
散り敷ける銀杏褥に幼たち
幹抱ふる五人の園児銀杏散る

栗を剥く刃二寸の肥後守
藁塚の日差しに混じり風の音
猪出づる警報流し消防車
先兵か中州に三羽ゆりかもめ
手の上のパン屑さつとゆりかもめ
葉脈のなんと細やかゴーヤ枯る
橋上にしばし見詰むるしぐれ虹
冬空の紫紺へ発てり伝書鳩

初時雨

松本三千夫

金輪際いろは紅葉の真紅なり
立冬の何と茶柱立つてをり
初時雨隠し十字の耶蘇の墓
膝抱きて耳暝る羅漢小春空
まつさきや冬田鴉に昏迫り
着物着てスニーカー履く七五三
太鼓橋に隣る朱の橋蓮枯れて
方尺の玻璃に動かず冬の蠅
時雨雲小坪漁港に厚かりし
山雀の手の餌啄む小春かな
清正井天地の冬を映し込み
日向ぼこ心の滓の溶け行ける

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

行く秋

松田泰子

秋天を深く沈めし山の湖
小鳥来るもの言ひたげな壺の口
木の実降る水の堅さのしろがねに
白もまたあたたかき色障子張る
まだ客のありて夜長の理髪店
黄落や神の山々動かざる
露草のいのちの露をこぼしけり
桔梗の折目正しく開きけり
残菊の必死の蕾ひらきけり
冬うらら鴉のあとを鳩あるき

夕霧

森清信子

社殿より洩るる笙の音松手入
桔梗や谷戸の日差のひきしまり
白雲の湖に映え水澄めり
夕霧の消し残したり溪の音
神苑掃く巫女の薄着や一位の実
山村の一目十戸や穂絮飛ぶ
ゆるびたる身の縮まりレモンの香
鳥渡る沖より続く海の照り
湖に渡す浮橋櫓紅葉
山上の展望デッキ溪もみぢ



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



落し水

岡田史女

人の手に託すたんぼや落し水
秋うらら仮装の魔女と天使らに
雁渡る雲のたなびく八ヶ岳
放たれし羊の群や小六月
茶の花を咲かせ陶房閉ざさるる
吹き溜る落葉の嵩や砂防ダム
菰巻きや縄目のしろき花結び

雁渡し

岡野里子

滝めける森の光芒小鳥来る
海原の色押し合へり雁渡し
阿羅漢のあぎとにひかり露の玉
つむり搔き笑ふ阿羅漢放屁虫
秋天や電柱のなき蔵の町
山里は黄金色なり賜日和
稲架掛けの終り胡坐の男達

群雀

加藤静江

刈り残す稲田を発てり群雀
堰音の清しき里や秋高し
金木犀ひかりを引きて零れけり
水神へ捧ぐる一句秋澄めり
朝霧を四方に従へ筑波山
秋気澄む手動のドアの一輛車
友逝くや咲き急ぎたる秋の石路

蔵町 菅野日出子

雉鳩のくぐもり鳴けり台風過
先乗りと見ゆる七羽の羽白鴨
いづこより調律の音秋気澄む
秋祭終へて蔵町小糠雨
鶏頭を活けて春日の化粧の間
本堂を響もす法鼓秋時雨
枯蓮や鯉のあぎとふ濁り池

時の鐘 堺昌子

身に入むや亭午をつぐる時の鐘
店蔵の暗さに慣るる秋土用
秋深む菓子の木型を飾る店
色変へぬ根上がり松や禅の庭
手のとどく六個をとりぬ柿熟るる
雨あとの木屋かをる美術館
生垣の山茶花の白日を返す

浦小春 中野久雄

歩を刻む紅葉且つ散る男坂
抜け道の土の湿りや残る虫
木の実降る過疎の翳濃き峡の里
魚網結ふ媼の黙や浦小春
一湾を臨む切岸冬すみれ
差し潮のし吹く荒磯や石露の花
谷川の渡つ瀬に舞ふ木の葉かな

照葉 西川みほ

登るごと末^{うれ}に照葉や箱根山
芦の湖の和^なぎ乱し過ぐ雁渡し
天高し鳥語の占むる二子山
芦の湖を囲む連山霜時雨
秋夕焼海賊船の水尾を染め
神の留守賽銭箱の拭き掃除
深々と飛驒の青空朴落葉

青炎集

横浜 大川 暉 美

朝霧の霽れて穂高の連なりぬ
走り根に足を取らるる神の留守
胡麻の束軒に吊して蔵の店

暁の波おだやかや神送り

雨上がり黄の鮮しき石路の花
身に入むや般若心経口遊び

横浜 及川 照 子

ふるさとへ帰心頻りや鰯雲
秋彼岸故郷の山へ深呼吸
將軍の手植糸の大樹うす紅葉
ざくろ裂け鬼の顔とも笑顔とも
鶺鴒高音天神様へ通りやんせ
福耳の羅漢の笑顔小鳥来る

小川玉泉選

横浜 戸田 澄 子

夕顔の白ぼつかりと闇夜かな

時頼忌を明日に小春の日和かな

誰も知らぬこんなところに返り花

余生とは美しきものなり冬紅葉

冬木の芽公園に子ら草野球

裸木の競ふ姿の雑木山

横浜 上月 智 子

刈萱の三つ編みにされ遊歩道

菊の庭褒めて道問ふ日暮れかな

もやひ結び教はる子等や浦祭

椎茸の形の大小直売所

飛び立ちて鳥の落とす熟柿かな

映画館出でて入日や銀杏散る



横浜

波多野孝枝

単線の車窓芒の途切れなし
白壁の隔離病棟カンナの朱
外つ国の人と御薄や紅葉茶屋
父の忌や墓に掛けたる新走
地境は煉瓦一段柿熟るる
一両車のスイツチバツク雲の秋

横浜

河合とき

皇后の帽子小さや菊日和
旅に買ふ地酒は新酒天狗舞
ころざしなどと今更いわし雲
女郎花あまた咲けども独りなる
月代や遠く雨戸を閉むる音
裏木戸へ飛石伝ひ石路の花

横浜

山崎稔子

八の字に開く蔵の戸秋気澄む
黒檀の欄間の彫りや萩の宿
黒檀の蔵の柱や秋灯
ふかし甘藷の匂ひの満つる小路かな
黙りの釣人の背や秋日影
ひび割れの深き秋茄子ほまち畑

横浜

斉藤マキ子

絵硝子のマリヤ越しなる秋日燦
カルストの石白々と秋深む
残照の石州瓦鷹わたる
秋寒や蔵の出口の防火桶
鍋底を音立て磨く夜寒の灯
家苞の手焼煎餅菊供養

横浜

原和三

喜多院の軋む回廊賜高音
うす紅葉朱色きはだつ多宝塔
句会果て秋灯にじむ蔵の町
矢音澄む弓道場や暮の秋
わら砧打つ古民家や昼ともし
蒼天や黄を深めたる棟の実

横浜

正谷民夫

河岸近き貝殻路や秋簾
コスモスと萩を括りて里暮らし
野鼠の齒跡ばかりや落ち胡桃
賽銭の落つる音聞く夜寒かな
露けしや石に火花の草刈機
雲行くを道化見上ぐる暮の秋

耕 土 集

松本三千夫選



虫すだく何やら心せかれをり

横 浜 佐々木永子

水面より紅葉の錦迫りくる

空の色風の色にも秋惜しむ

登校の児童にそそぐ初時雨

不忍の池のさざ波夕時雨

帆を上げて秋日に映ゆる日本丸

横 浜 秋山 文子

貴婦人という帆船や秋澄める

秋つらら旅行匏へ詰める夢

病む夫の歩みに合せ芒原

新米を炊き上げ匂ふおこげかな

考に似し羅漢の笑顔木の実落つ

岡 美智子

新そばの幟はためく蕎麦街道

秋草やゆらりと高きものばかり

片隅の日溜りわずか石路の花

山茶花や白き花びら散るもよし

草 加 泉 和美

清らなる合唱歌祭や文化の日

立冬の風と覚ゆる峠かな

腰伸ばす婆の箒目神の留守

昼は上司タベは禰宜や酉の市

酔牡蠣食みいよよはじまる艶話

横 須 賀 齋藤 眉山

雨音の瀬音にまぎれ白障子

だれかれの異邦人めく落葉道

お濠端つがひの鴛鴦の眠りをり

冬星のまたたくたびに煌らかに

横 浜 宮地 静雄

方言の集ひて軽し文化の日

稲刈の歌は廢れてコンバイン

橋脚のまま十余年枯野原

男一匹楽しく行かむ石路の花

仲 高倉健

朝どりの寒鰯料理店の列

烟中の一本道や鰯雲

横浜 峰 幸子

冷まじや寺領の果の土の牢

朝寒や散歩まだかと犬の待つ
渋抜けて日をとどめおく吊し柿

今野 明子

土牢の格子にからむ落葉かな

入院の夫林檎囁む音密か

名木の銀杏黄葉や天守閣

床の間に挙りて爆する蔓もどき

織月や会ふたび母の小さくなり

一陣の風に抱かれ銀杏散る

コスモスを抜ける風の匂ひかな

相模原 内田 梢

太刀魚の背びれ光るや釣三昧

川崎 田中 繁夫

コンサート終りて釣瓶落しかな

穂高岳朝日に染まり谷紅葉

喪葉書の天寿全う花八つ手

上高地の懐に入り秋惜しむ

夕日さす障子に遊ぶ鳥の影

陽を捉へ錦いや増す照紅葉

枯れてなほ輝き勝る銀杏かな

暮早し深き土塁の曲輪かな

敗荷の花展の華となりにけり

川崎 滋野 暁

母植系し大樹の柿の甘きかな

横浜 成井 隆之

秋澄むや北へゆつくり飛行船

バス停ひとつ速歩競ひぬ今朝の秋

画仙紙の反古の山なり文化の日

妻留守の零余子炊き込む昼餉かな

吊し柿干せるばかりの色と艶

硫黄煙ふる足湯の里や秋深し

冬晴や稜線しかと八ヶ岳

夕映えの江の島灯台霧晴るる

読みさしの本を伏せたり温め酒

横浜 谷島 弘康

すいつちよに馬乗りさるる木の葉かな

北郷 和顔

帯解や母の装ひ際立ちて

月蝕に居合はす今日や秋の嶺

潮風をうけて色増す唐辛子

髭剃るや鏡の中のでぞろ寒

一枚を重ねたき日や紅葉狩

シヨパン弾く妻のピアノや冬薔薇

日暮るるや瀬音のゆるき川床料理

御嶽へ悼みこころの雪積る